

(特別)「音楽鑑賞会(紀尾井ホール)」

(紀尾井レジデント・シリーズ)

紀尾井ホールの新企画「紀尾井レジデント・シリーズ」、これは如何にも紀尾井らしい熱のこもったプロジェクトである。一人の演奏家あるいは1団体とタッグを組み、そのアーティスト(達)に年1回のリサイタルの場を3年間にわたって提供し、そのアーティスト(達)の魅力を育て引き出してゆこうという構想である。レジデント(resident)は「居住者」という意味であろうから、紀尾井の「身内」としてサポートしてゆくという決意の表明でもあろう。

その第I弾はピアノの「葵トリオ」(本年3月16日演奏)であったが、それに続く第II弾として4月6日のステージに登場するのが、古楽の分野で世界的に目覚ましい活躍をみせ、第31回(2020年度)日本製鉄音楽賞フレッシュアーティスト賞も受賞している川口成彦(かわぐち・なるひこ)である。そして当日、彼の演奏する楽器はフォルテピアノである。

フォルテピアノは18世紀から19世紀に多く使用されていた様式のピアノとされ、チェンバロに近い細い弦を持ち、現代のピアノのような金属フレームは持たない。そうした構造から、大きくはないが軽快な音色が特色であり、他方音の響きの持続は短いといわれる。

川口はプログラムに掲載の挨拶文の中で、フォルテピアノでの演奏の狙いを「現代のピアノでは再現できない『音』と共に作品を再構築するというクリエイティビティがあり」「現代において広く知られた作品が全く新しいものとして鳴り響く可能性を孕んでいる」と述べている。大きな展望をもった挑戦としてフォルテピアノに取り組む決意が伝わってくる。

会場は川口への期待の表れか、ほぼ満席の入りである。9名のアイアン・クラブ関係者も参加された。ステージにはライトに照らされ茶色の色調に木目風の模様をあしらったフォルテピアノがしつらえてある。当日の公演の副題に「プロムナード ~with エラール(1890年)」とあるが、このステージ上のピアノがフランスの楽器メーカー・エラール社(Erard)1890年製作の名品なのだ。

そこに川口成彦が大きな歓迎の拍手のなか、颯爽と現れる。ピアノの色調に呼応するような茶・灰色の身体にぴったりのスーツに濃い灰色の襟の大きいシャツ、ネクタイはなし、32歳という若々しさが一段と際立つ衣装である。手には楽譜をバインダーに収めて持っている。ピアノの前に座ると、おもむろにその楽譜を開き、いよいよ演奏が始まる。



1曲目は、バッハ(Johann Sebastian Bach, 1685 - 1750)の『主よ、人の望みの喜びよ』(Chorale from Cantata No. 147)である。最初の曲目に「音楽の父」とも讃えられるバッハの宗教色の濃い合唱曲由来のこの曲を選んだのは、バッハへの敬意もあろうが、この曲の旋律の美しさと宗教性がフォルテピアノの音色に最も適合していると考えてのことと推察する。祈りの空気とともに、実に端正な、澄み渡った音色が聴衆をフォルテピアノの世界に一気に惹き込んでゆく。素晴らしい幕開けである。なお蛇足ながら、Cantataは「歌唱曲、交声曲」、Choralは「衆讃歌」と訳語が付されているようである。

続いてノルウェーの作曲家グリーグ(Edvard Hagerup Grieg, 1843 - 1907)の曲が3曲続けて演奏される。まず、『組曲<<ホルベアの時代から>>op.40』。超絶技巧的なシャープな演奏で聴衆を酔わせる。続いて『君を愛す op.41-3』。川口が、真から楽しんで演奏していることが伝わってくる。そして3曲目が『ピアノ・ソナタ ホ短調 op.7』である。演奏に没入している姿

が爽やかに映り、川口がグリーグがフォルテピアノによる演奏に相応しいと感じてこのプログラムを組んだのだろうと共感できる。

川口成彦のこうした演奏を聴いていると、何やら音楽家の友人の書斎に招かれ、その友人の演奏をそこで聴いているような、そんな心地よさを覚えてきた。それはフォルテピアノの大き過ぎぬ音量と軽妙な音色のためか、奏者の如何にも楽しそうな演奏のせいなのか、それらが一体となった空気なのか。ともあれ、とても心地よい気分で後半を迎えることとなる。

後半はロシア / ウクライナ・シリーズといっても過言でないプログラムである。勿論、このプログラムの企画時点ではウクライナ危機など思いも寄らぬことであつたであろう。巡り合わせとは奇妙なものである。

後半の最初はチャイコフスキー (Peter Ilyich Tchaikovsky, 1840 - 1893) の『哀歌 op. 72-14』である。しっとりした心に浸みる悲しみの表現にもフォルテピアノの音色が適していることを感じさせる。旋律もとても美しい。

そして次のムソルグスキー (Modest Petrovich Mussorgsky, 1839 - 1881) の『組曲<展覧会の絵>』に移る前に、川口がマイクを手にし当日の副題にある「プロムナード」の謎解きをする趣向が始まる。この「展覧会の絵」は、ムソルグスキーの親しい友人で画家・建築家のヴィクトル・ハルトマン (露語読み：ガ

ルトマン、Viktor Alexandrovich Hartmann, 1834 - 1873) の早世を悼みレクイエムとして作曲されたもので、美術館に展示されたガルトマンの10枚の絵の音楽的描写の間に、美術館の中を巡ることをイメージさせるあの馴染み深い短い間奏曲 (プロムナード) が入っている。これと、エラル (1890年) と共にフォルテピアノの世界を「散歩する (promenade)」を掛けているのである。何とも凝った謎かけではないか。

この謎解きで聴衆が一段と『展覧会の絵』に親しみを覚えたところで演奏が始まる。そして10枚の絵の最後の絵「キエフの大門」の演奏に平和への願いを託し、演奏を終了した。

会場は、心からの拍手が鳴り止まぬ。川口はこれに応え、平和を祈る言葉と共にキーウ (キエフ) 生まれの作曲家グリエール (Reinhold Moritzovich Gliere, 1875 - 1956) の『子供のための小品・夢』を奏した。しかし更にアンコールを求める拍手は止まらない。続いて「ロシア五人組」の一人・ボロディン (Alexander Porfir'evich Borodin, 1833 - 1887) の『小組曲・少女』を平和への願いと共に静かに演奏し、川口成彦の「レジデント」としての第1年目の公演が幕を下ろした。

来年・再来年の演奏を期待して会場を後にした聴衆も多かったことであろう。フォルテピアノの魅力に触れた、充実した時間であった。(保倉 裕・記)

